

令和7年度
中野市立南宮中学校
被爆地派遣事業報告書（広島市）



① 「広島で感じた平和への向き合い方」

山本 美月

② 「～戦争について考えたこと～」

松宮 翠

③ 「広島に行って考えたこと」

飛岡 紗衣良

広島で感じた平和への向き合い方

南宮中学校 3年 山本 美月

広島に滞在した二日間、私たちは平和のことについて学びを深め、平和への向き合い方について考えてきました。

1945年8月6日午前8時15分、広島に一発の原子爆弾が投下されました。それは、一瞬で広島を破壊し、たくさんの人の命を奪いました。平和記念資料館では、そんな原爆の悲惨さを思い知らされました。皮膚が焼け爛れた人々、黒い雨を必死に飲もうとする人々、被爆で苦しむ人々。信じられない光景がそこにはありました。印象的だったのは、原爆で亡くなってしまった人の遺品の展示です。こんなことが本当にあったんだと改めて胸が詰まるような気持ちになりました。全てが予想以上に悲惨で、何とも言えないような感情になるばかりでした。一発で全てを消し去ってしまう原子爆弾。この悲惨さを絶対に忘れてはいけなかったと思います。



平和学習の集いでは、他の学校の生徒の皆さんと、戦争の被害を通して、平和について考えました。どの地域でもたくさんの被害があり、改めて戦争の恐ろしさを実感しました。

「平和でない状態とはどのようなことがありますか。それはどうしたら解決できると思いますか。」というテーマで話し合いをした時は、たくさんの意見が出て、私もSDGsを観点にした意見をたくさん共有することができました。



このディスカッションを通して、「自分が何かしても何も変わらない」と決めつけるのではなく、「自分が何かしたら何かが変わるかも」という気持ちを持つことが大切だと知りました。また、被爆地である広島市の生徒の皆さんが平和に対してすごくポジティブな考えを持っていて、私も今起きている全ての問題に対してポジティブな考えを持ち、少しでも解決に向かっていく姿勢であることが大事ということも感じました。

他にも、平和式典に参加したり、被爆者の方のお話を聞いたりなど、現地でしか体験できないことをたくさん体験できました。私は広島に行く前は、原子爆弾が8月6日に落とされたことくらいしか知りませんでした。今回実際に広島を訪れて学んだことで、それ以上のことまで知り、平和について考えを深めていくことができました。そして、たくさんの人から平和への向き合い方についても学びました。被爆者の笠岡貞江さんは「原爆が落ちた後は、みんなの心が無くなっていた」とおっしゃっていました。原爆は、人が人ではなくなってしまうほど悲惨で残酷なものなのです。今、日本の周りには核兵器を所持している国がたくさんあります。原爆の恐ろしさを知っているからこそ、絶対に核兵器を使わせてはいけません。しかし、最近平和への関心が薄いように思います。なので、報告の場で、平和の意識を少しでも高められるよう、この二日間で学んだことをしっかり伝えていこうと思います。

笠岡さんのお話で、こんな言葉が出てきました。

「仲良くしていれば戦争なんてものは起きない。」

みんな仲良くすることを大切にしてほしい。」

いつかは被爆者のいない世界が訪れます。平和な世界を創っていく私たちは、この事実、そしてこの言葉を絶対に忘れてはいけません。

～戦争について考えたこと～

南宮中学校 3年 松宮翠

今年で広島に原爆が投下されてから80年が経ちました。私たちは広島に行って、当時の被害や状況を学習し、平和記念式典に参加してきました。

80年前、食べるものも、飲むものも、着るものもなく、学校にも通えない世の中。国のために子どもまでもが、何もかも我慢し、働かなければならなかった。そんな中、8月6日午前8時15分、ピカッと光りドーンと鳴った瞬間、熱線により地面が3000～4000度になり、全身火傷で苦しむ人。爆風によって倒れてきた建物の下敷きになって苦しむ人。爆破直後、川は死体で溢れかえり、道には死体が転がり、町の物は溶けてなくなり、まるで別の世界。放射線を浴び、戦争が終わってからも何年も苦しんだ人。家族や友達を亡くし、孤独を感じて生きてきた人。「被爆者」という理由で差別され、就職、結婚を何度も断られた人。



たった一発の爆弾がたくさんの人々の夢や希望、14万人以上の命まで奪っていったのです。そんな恐ろしく、悲しい過去が日本、広島にあったのです。遠い昔の話ではありません。日本は決して忘れてはいけません。

広島には、昭和39年に点火されて以来ずっと燃え続けている灯があります。この灯は核兵器が地球上から消えるまで燃え続けます。今でも世界では戦争をしている国があります。核兵器がなくなり、この灯が消える時、平和な世界が訪れます。



今、被爆者が減少し、被爆者の平均年齢が86歳になりました。いつか、被爆者がいない世の中が来てしまいます。私たちにはこの日の出来事を後世に語り継いでいく義務があります。同じ過ちを繰り返さないために。

今の私たちが身近にできることもたくさんあります。簡単なのは友達と仲良くすることです。国同士の喧嘩がなければ戦争は起こりません。文化や言語の違う人々が思いを通じ合わせることは難しいです。たくさん話し合い、理解することが大切です。友達と意見が違った時、相手の話を聞いて理解し合うことが平和の世界への一歩に繋がるのではないのでしょうか。

今回の広島での学習で、毎日当たり前のように安心して送れる生活に、自分がどれだけ幸せなのかを痛感しました。毎日安心して寝られること、三食美味しいご飯を食べられること、友達に会えること、学校に行って勉強できることなど、80年前は当たり前ではありませんでした。今、当たり前で送られている生活が、当時の人たちは欲しくてたまらないものでした。私は今、とても幸せです。「当たり前」が「当たり前」にできているこの生活に感謝していきたいです。

広島での学習で、本当に多くのことを学びました。とてもいい経験になりました。行かせていただいた市役所、学校のみなさんに感謝しています。広島で学んだことをたくさんの人に伝えていきたいです。

広島に行って考えたこと

南宮中学校 3年 飛岡紗衣良

八月の五日と六日、私たちは広島へ行きました。

まず、五日に平和学習の集いに参加し、日本中から集まった派遣児童や生徒、広島の現地のボランティアの人と一緒に平和について話し合いました。

戦争による被害や、「世界が平和になる」とはどういうことかについてディスカッションしました。広島に落とされた原爆だけでなく、人口の多かった都市から子供が集団疎開していった集落まで空襲され、その被害は甚大だったそうです。今、世界は「平和」と呼べる状況ではないかもしれません。しかし、武力による争いは絶対に解決へ繋がらないと思います。武力でしか解決ができないと判断してしまう状況ではなく、話し合うことで解決できると思える世の中になっていくことが大切だと感じました。



そして原爆資料館で、原爆や広島について詳しく学習しました。真っ黒に焼けたお弁当、被爆して亡くなられてしまった方の日記、実際に被爆した人の当時の姿や後遺症によってできたケロイドの写真を見て、文章で学んだものとは違い、これが現実なんだと実感させられました。資料館には海外の人もいました。実際、日本の人たちが世界に問いかけても、届きにくいこともあると思います。そこで、資料館に訪れた人々が一人でも多く広めていくことで核根絶に繋がっていくのではないのでしょうか。核根絶は日本だけの目標ではないことを世界に伝えていくことから始めるべきだと思います。



六日には平和記念式典に参加したり、全国こども平和サミットで五日より多い派遣児童・生徒と原爆が落とされた当時の広島の様子を3Dの映像にしたものを見たりしました。平和記念式典には世界の124ヶ国と地域の代表の方や日本政府の関係者が参加していて、平和への想いを話していました。全国こども平和サミットで見た映像では原爆を目視してから爆発するまでの間は殆どなく、作られた映像でも恐怖を感じました。これを当時見た人は恐怖を感じるまもなく亡くなってしまったんだと思うと本当に核爆弾は無くすべきだと思います。

そして、五日と六日の二日とも被爆者の方の話を聞きました。お二人の話を聞き、共通していると感じたことは、自分たちに起きたことを伝え、本当に平和を作っていきたいという思いがあることです。平和学習の集いでお話を聞いた笠岡さんは世界が平和になる為には仲良くする事が必要だとおっしゃっていました。世界で戦争が終わらないのも、お互いが自分が正しくて相手を敵だと思っているからで、相手のことをよく知り、仲良くすることで世界は平和になっていくのだと思いました。

広島に実際に行って、今まで知っていたことよりももっと過酷で辛いことを知ることができました。私のような一人の中学生にできる事は少ないです。しかし、ここで知ったことを無駄にするのではなく、他の人にも伝えていくことで、世界の核爆弾を無くし、世界が本当に平和になれば良いと思います。